

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 吳守鎮

論文題目 韓国語の文末名詞化構文・連体終止形に関する  
認知類型論的研究—日本語との対比を通じて—

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	堀江薫
委 員	名古屋大学准教授	奥田智樹
委 員	名古屋大学教授	靱山洋介

## 論文審査の結果と要旨

### 【論文の意義】

本博士論文は、認知言語学と言語類型論を融合させた「認知類型論」の観点から、韓国語の文末に生起し、「名詞」に深く関わる文法的特徴を有する二つの構文、すなわち「文末名詞化構文」と「連体終止形構文」の意味的・語用論的特徴を、日本語の対応する構文との比較を通じて解明した研究である。文末名詞化構文とは、韓国語の「~kes-ita.」や日本語の部分的に対応する「~のだ。」のように、「kes」や「の」のような名詞化辞が「ita」や「だ」のようなコピュラを伴った形、あるいは「~の。」「~kes.」のようにコピュラを伴わない形で文末に生起し、特定の文法的意味を有する構文として文法化した形式である。

また、連体終止形構文とは、日本語の「~みたいな。」、韓国語の「~kes-kathun.」のように本来は直後に生起する名詞を修飾する形態でありながら、文末で単独で用いられ、固有の文法的・語用論的意味を有する形式として文法化したものである。

これら二つの構文は、SOV という語順を有する日韓両言語の文末の述語として、話し言葉、書き言葉、あるいは両方の特徴を有するインターネットのチャットやブログといったジャンルにおいて高頻度に用いられ、話し手や書き手の主観的態度や、聞き手・読み手に対する配慮・ポライトネスなど様々な語用論的な効果を伴って用いられる重要な構文である。

韓国語と日本語は類型論的には、語順や形態的特徴の点で同じタイプの言語同士であるだけでなく、文法・語彙の点で著しい類似性を有した言語であり、格助詞、述語の構造、敬語体系に至るまで、様々な文法の領域において、表面的には非常に類似した機能を果たす形式が両言語に存在している。同時に、両言語の対応する形式を詳細に比較すると、ある時は非常に微妙な相違が見られ、別の際には表面的な類似性にも関わらず非常に明瞭な対比が観察されることが知られている。また、語彙項目が機能語に変化する文法化の観点や、機能語の機能拡張（多機能化）の観点から見ると、多くの場合、日本語が韓国語よりも文法化や多機能化が相対的により進む傾向があるという観察も先行研究でなされている。

このように両言語は対照言語学の観点から比較する対象として非常に興味深い言語同士でありながら、残念ながら両言語の相違を理論的及び記述的に堅固な基盤で捉え、説明的な妥当性を満たした研究というのはそれほど多くない。

本博士論文は、すでに先行研究において文法的機能や語用論的機能において多くの知見が得られている日本語の文末名詞化構文と、近年語用論的機能に関して研究が進展しつつある日韓語の連体終止形構文の研究成果を把握した上で、認知言語学および言語類型論を融合した認知類型論や語用論の観点から、これまで体系的に分析されてこなかった韓国語の文末名詞化構文および連体終止形構文の文法的・語用論的機能の解明を行った。本博士論文の最も重要な意義は、韓国語のこれらの構文の文法的意味や語用論的意味、さらに機能拡張や文法化に関して、どこまで日本語と類似しており、どのような点で相違しているかという全体的な見通しを初めて示した点にある。これまで「のだ」と「kes-ita」といった対応する形式同士のミクロな対照言語学的研究は多く存在したが、本研究のように韓国語の文末名詞化構文の全体像を示したものは殆どない。また、連体終止形構文に関する研究は韓国語においては体系的に着手されておらず、本研究の新規性は高く評価される。

**[論文の概要]**

本博士論文は、韓国語の複数の文末名詞化構文および連体終止形構文の文法的・語用論的特徴を、日本語の対応する構文との比較を通して、認知言語学や言語類型論の融合分野である認知類型論や文法化、語用論の研究の知見を積極的に援用し、体系的に解明した。

第一章では、本博士論文の研究対象とする構文の種類を同定した。その際に、従来研究が多く行われている「~kes-ita.」のような定着度の高い構文と、あまり研究されてこなかった「~ta nun kes. (~ということ。)」や「~ki-ita. (~ことだ。）」、「~kes kathun. (~のような。)」のような新奇な構文の両方を取り上げること、本研究が文末名詞化構文および連体終止形構文を体系的・網羅的に分析していく方向の研究であることが明示される。また、後者のようにまだ人口に膾炙していない新奇な構文をも扱うため、方法論として、新奇な表現が頻出するインターネット上の言語使用に関わるデータも積極的に活用する方針が示される。

第二章では、認知類型論と文法化、ポライトネス理論という本研究の理論的背景が提示される。また、第三章では、文末名詞化構文に関する韓国語および日本語の関連先行研究のレビュー及び、文末名詞化構文と連体終止形構文の両方を共通の観点から分析するための「従属節の主節化」という現象に関する先行研究のレビューが提示される。これら二つの章によって本研究の分析・考察の基盤が示されている。

第四章では、韓国語の名詞化辞のうち最も頻度が高い「kes」が、コンピュータと結びついた「kes-ita.」およびその変異形として「-tanun」（「という」に相当）を伴って用いられる「~ta nun kes(-ita).」のような文末名詞化構文の語用論的機能を、日本語の対応する「~ということ(だ。）」との対比を交えつつ分析する。

第五章では、文末名詞化構文のうち、名詞化辞「ki」と「(u)m」とコンピュータが一体となった「ki-ita.」「(u)m-ita.」、さらに後者の変異形である「sim(-ita).」などの新奇表現の機能の分析が行われている。

第六章は、韓国語において「連体終止形」がどのような機能を有しており、どのようなジャンルにおいて使用されているかを、類似性を表す述語の連体形である「kes-kathun.」を例にとり、日本語の「~みたいな。」との対比を通じて例証している。さらに、一般述語の連体終止形用法のインターネットやテロップ（テレビ番組）で用いられている興味深い現象を指摘している。

第七章は総合的な結論と展望を述べている。

**[審査委員会による審議および合否判定]**

口述試験では、申請者の方から博士論文の各章についての説明が行われた後、審査委員からそれぞれに質疑応答が行われた。審査委員全員が、本研究の韓国語の文末名詞化構文・連体終止形構文の体系的記述への貢献という意義についての評価では一致した。その上で内容、形式上分かりにくい点や誤記についての確認以外に、特に質問が集中したのが、(I) 本研究が通言語的、類型論的な研究と言えるのか、(II) 本研究から、日本語の文法研究に対して新たな知見や再検討が提示できているのか、という二点であった。

(I)に関しては、本研究はあくまで韓国語の文末名詞化構文と連体終止形構文の文法的・語用

別紙 1 - 2

論的機能を日本語の対応する構文との対比で解明することを目指した対照言語学的研究であり、通言語的・類型論的研究に対してはケーススタディを提供するという間接的な貢献を行うものであり、直接それ自体が通言語的・類型論的研究ではないという点が確認された。

(II)に関しては、本研究は日本語の先行研究を参照しているものの、それを批判的に再検討したり、新たな日本語の現象の発掘を目指すといった志向性の研究ではなく、あくまで主眼は日本語を反射鏡として、韓国語の文末名詞化構文と連体終止形構文の機能を体系的に解明することにあることが確認された。

以上二点を中心に審査委員から様々な指摘や改善点、今後の検討についての助言がなされたが、それぞれの点について適切な回答が得られた。また、その後、必要な部分の訂正と加筆が行われた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。